まえがき

台所、風呂、ガラス、調味料などなど——わたしたちの生活を見回すと、普段なにげなく使っているものがたくさんあります。なかには水洗トイレのように、それがない生活など考えられないものもあります。でも、現在のように手軽に使えるようになったのは、長い歴史の中で、さまざまな人たちが考え出したり、工夫を重ねたりしたおかげなのです。

そこで、毎日の生活でわたしたちが使っている設備や日用品、口にしている食べ物などの歴史を探ってみました。すると、意外なことがわかってきました。たとえば、そばやうどんは細長いのが当たり前と思っていますが、最初の頃のそばはおかゆ、うどんはワンタンのようにして食べていたようです。

また、かき氷は最近になって食べられるようになったと思っていませんか。それは大まちがいで、実際には、平安時代にはすでに食べていたというのです。でも、氷を保存する冷凍庫などなかった時代に、どのようにして当時の人たちは氷を手に入れていたのでしょうか……。

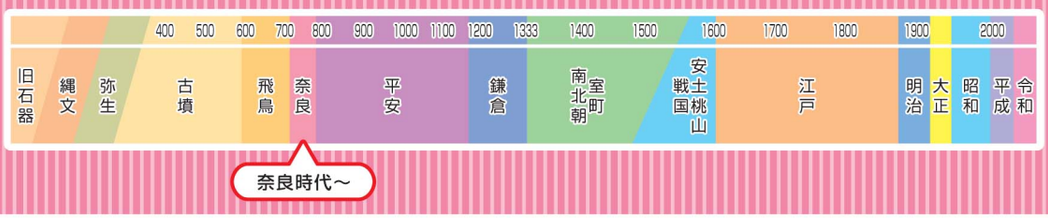
この本をきっかけにして、わたしたちの生活を進歩させ、豊かにしてくれる道具や習慣について学んでほしいと思います。

もくじ

ほうき・はたき …… 4
枕 …… 6
炊飯器 …… 8
水洗トイレ …… 10
風呂 …… 12
台所 …… 14
チーズ …… 16
かき氷 …… 18
調味料 …… 20
そば・うどん …… 22
昆布・鰹節 …… 24
菓子 …… 26
レシピ本・グルメガイド …… 28
ファストフード …… 30
1日3食 …… 32
花火 …… 34
ガラス …… 36
辞書・辞典 …… 38
参考資料 …… 40

ほうき・はたき

身の回りをきれいにしておきたい・・・。それは、時代を問わず人々が求めてきたことでしょう。その思いを実現するため、日本人が昔から使ってきたのが「ほうき」と「はたき」です。この２つの掃除用具は切っても切れない関係にあるように思えますから、誕生も同じ頃だと思ったら、大まちがい。実は、その歴史には大きな差があったのです。



最近は掃除機しか使ったことがない人も多いようですが、床や畳の上に落ちたゴミやチリをはくときに使う掃除用具が「ほうき」で、高いところにたまったチリやホコリを払い落とすのに使うのが「はたき」です。

昔のほうきは鳥の羽毛でつくられていましたが、現在はヤシの木の表面の繊維やホウキギの茎を束ね、竹などの柄をつけたものが一般的です。

形にちがいはあるものの、ほうきは古代から使われていて、和銅５年（712年）の日本最古の歴史書『古事記』にも出てきます。ただし、当時は「ははき」と呼び、これは「羽掃き」や「葉掃き」のように、使い方に

由来したものとされています。

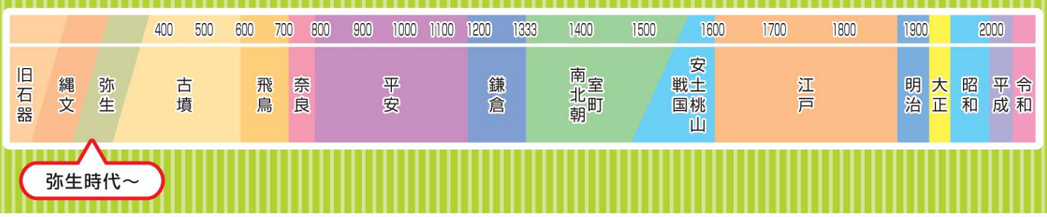
また、ほうきには「不思議な力が宿る」とも信じられていて、「生命の木」という意味の「母木」から変わった言葉だという説もあります。実際、ほうきで妊婦のお腹をなでたり、部屋に立てかけると安産になると言われていました。奈良の正倉院に残されている玉箒という日本最古のほうきも、新年にこれで蚕部屋を掃除すると、絹糸がたくさん取れる神聖な道具とされています。

はたきは、細い竹などの柄の先端に、羽毛や細く切り裂いた絹布や和紙などを結びつけた掃除用具ですが、その歴史はほうきよりかなり新しく、使われはじめたのは江戸時代の中頃のようです。これより前は、羽毛でつくられたほうきや、葉のついた竹の枝が、はたきがわりに使われていました。

はたきという専用の道具ができたのは、建物のつくり方が時代とともに変化したからです。高いところにチリやホコリがたまりやすい障子や、柱と柱をつなぐ長押という部材が使われるようになったためと考えられています。

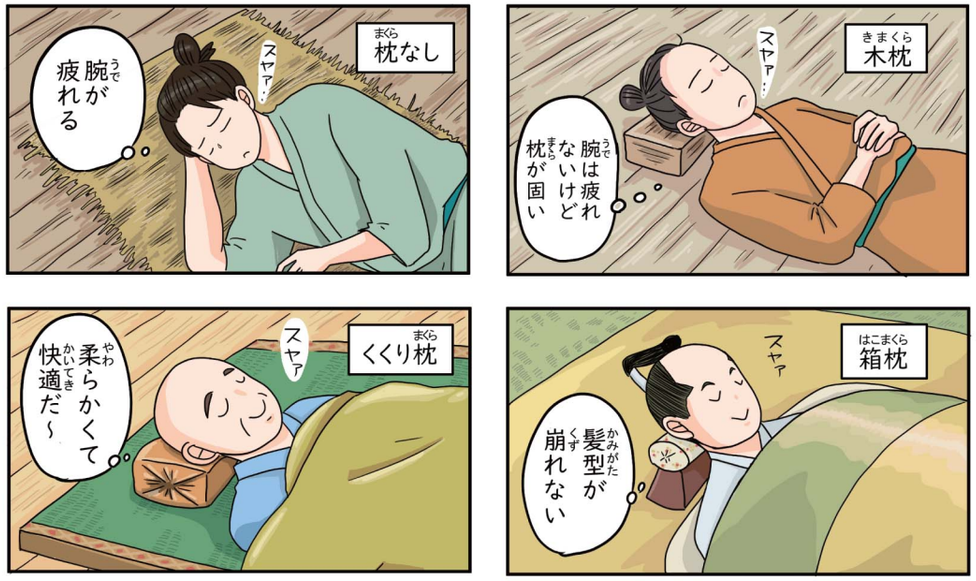
枕

いつの時代でも、人には眠りが必要です。眠りは一日の疲れを取り、明日の力を生み出すために必要だからです。快眠のために欠かせないのが枕ですが、かつては個人の魂が宿るものとも考えられていました。こうした考え方から、昔は「枕をまたいだり、蹴ったりしてはいけない」とされ、大切に扱われてきました。



日本最古の枕は、福井県福井市にある甑谷在田遺跡の墓で発見された木製のものと伝えられています。この墓は弥生時代中期のものと考えられているので、紀元前２世紀〜紀元１世紀頃には、すでに枕が使われていたようです。

記録に残る最古の枕は『古事記』に登場します。ただし、ここでは「麻久良」という漢字が使われています。これは当て字で、「まくら」の語源として考えられているのは、「頭座」「目座」「魂倉」などで、枕は魂が宿る大切なものという考え方もありました。



奈良時代末期に成立した『万葉集』には、つげや杉、朴の木などでつくられた「木枕」と、筒状の布の中に茅や薦、稲などを詰め込み、両端を縫った「くくり枕」が登場しますが、柔らかいくくり枕は贅沢な品で、ほとんどは平安時代の公家や武家などで使われていました。

ちなみに、奈良の正倉院には「白練綾大枕」という、くくり枕が保管されていて、これが現存する日本最古の枕と言われています。

また、岩手県の中尊寺には、奥州藤原氏が12世紀頃に使っていたとされる、さまざまな色糸を使って織られた豪華な布地の「くくり枕」が残されています。

江戸時代に入ると、髪型を保護するため、木製の小箱の上に小さなくくり枕を載せた「箱枕」が主流になりました。しかし、明治時代に西洋文化が入ってくると、再び柔らかな枕が優勢となっていきました。

ただし、現在のような比較的平らな枕が使われるようになったのは、昭和初期頃のようです。

よい眠りのために枕は大切なものです。高すぎても低すぎても、ぐっすり眠れません。そればかりか、肩や首のこり、顔のむくみの原因にもなります。さまざまな分析や方法により、健康によい枕の研究が進められているようです。